（2009 年 1 月 17 日　第 1 版）

本吉郡気仙沼より難船ニテ国々被流る事

所有：花坂蔵之助 （複写？岩手県宮古市の郷土史家？）
解読：奥平繁夫 （宮古島出身、東京在住）
所蔵：沖縄県立図書館

・　花坂氏が所有する古文書を奥平氏が複写、解読し、寄贈した。

日時：（文政 6（1823）年？）10 月 23 日
内容：漂着の顛末書
宛先：大坂御番所役人
送付人：「船頭」とあるが、不明。

船名：新衛船
船頭：亀吉
乗水主（乗組員）：8 名
庄七、圓蔵、長蔵、萬蔵、源兵衛、甚七、國治、不明（おそらく死亡者）

文政 5（1822）年

10/11	気仙沼湊　出帆	鰹節、魚粕、添油を積載
10/12	金華山瀬戸（石巻・鮎川浜）　潮懸（停泊）	
10/13	金華山瀬戸　出帆	
10/14　夜 9 つ	寒風沢湊（塩釜・寒風沢島）　潮懸	
～11/20	寒風沢　滞在	
11/20	北西微南風にて出帆	戌の風
11/20	平潟湊（北茨城）　潮懸	
～12/13	平潟　滞在	
	北西微北風にて出帆	
12/13　夜 9 つ	北風強し	
12/14	銚子湊　潮懸	
	波高く入港できず、江戸へ向かう	
12/18	房州沖にて大雪と大風に見舞われる	
12/18	七島湊（伊豆）に係留	
	鰹節、魚粕、椎茸など 250 石ほど投棄	

	風強く断髪して神願する	
文政 6(1823)年		
1/6	西風が吹く	酉の方風
1/7～1/8	帆流し、風にまかせ東へ流れる	卯の方へ
1/9？	北風なごやか、しかし陸地見えず	
1/8　7 つ頃	宮古島へ漂着	『宮古島在番記』(1780)では大浦村東表赤浜へ漂着と記述
	船中泊	
1/9　朝	宮古島へ上陸	
	50 代らしき男 3 人来たが言葉通じず	
	船員、親指を立て「島の親分は誰か」尋ねたり、手を合わせたりしてジェスチャーで会話	
	男の案内で約 8km 先の平良村役所へ	
	役所でも言葉通じず	
	近所の寺の僧侶が通訳	薩摩支配以降に建立された臨済宗・祥雲寺？
	役所より粥をもらう	漂着場所は宮古島、島尻と判明
昼 8 つ	30 人ほど炊き出しが集う	
	塩・焼酎・陸宿の提供を受ける	
	船中泊	
1/10　朝 4 つ	2 人の役人と 20 人が船内に乗り込み移動	
1/11　昼 8 つ	生間村　潮懸	
	船中泊	
1/12	生間村より川船 10 艘で平良村へ	
1/12　昼 8 つ	平良村着	
	船頭と親司、役所に申し出るも言語わからず	親司とは？
	書付とジェスチャーで説明	
	船中泊	
1/13　4つ	石引船で久貝村へ	
	船員 1 名死亡	
2/20	船頭亀吉が吐血	
	亀吉、船内で療養。4/6 まで煎薬 174 貼、洋山 35 匁、唐肉桂 11 匁 2 分　服用	
4/7	亀吉死亡	
4/8	沖で船を燃やす	本船の儀、舟道具の儀とは？
4/8～5/20	平良村の陸宿へ宿泊	
5/22	平良村　出帆	米 1 石 2 斗、粟 9 石、酢、しょうゆ、みそ、茶、薪、布をいただく
5/23　夜 5 つ	那覇川口湊　潮懸	

5/24	役所へ船頭亀吉の死亡を申し出る	
	役人立会で死体検分	
昼	役人と乗組員で亀吉の葬儀を行う	
	積荷の入札を相談する	
	鰹節、椎茸、添油、魚粕、舟道具	売立代　520 貫 695 文 （うち 211 貫文は舟道具）
	那覇で入札	
	鰹節の入札を田良浦甚左エ門船に委託	鹿児島で入札、655 箱、155 両 2 貫 870 文となり、役人が預かる
5/25	国主から全員に銅版帷子、唐扇子、花鳥三張	
	焼酎 50 杯さずかる	
7/21	那覇　出帆	
	飯炊用として米 6 俵、塩、みそ、酢、しょうゆ、	
	油、炭、薪、砂糖をいただく	
	幸順丸、 甚左エ門船頭	
7/27～8/8	山川（指宿市）湊	
	ここまで琉球王朝の役人が付き添う	
8/8	〃　　出帆	
8/9～9/13	鹿児島　着	
	御用宿に逗留	
	逗留費用はすべて薩摩藩が負担	薩摩より各乗組員へ頂戴 島木綿単物　1 枚 青銅　2 貫文 綿入れ　1 つ 銭 1 貫文 笠合羽　1 つ
9/13	役人付添のもと、鹿児島を出発	御付添 鮫島助左衛門 足軽　3 人 槍持　3 人
	諸入料、小遣、賄いすべて薩摩藩が負担	
	小倉にて御酒肴を頂戴	
10/9	大坂　薩摩屋敷着	
	御祝儀御酒肴が振る舞われる	
10/14	江戸御蔵屋敷から荷物船道具売代	
	218 両 3 歩、銭 3 貫 438 文のうち	「拙者共諸路用金御下ヶ被成下直ニ御談仕」とは？
	18 両 3 歩、銭 3 貫 438 文を現金化	
10/15	大坂　発	
文政 7（1824）年		
3 月	御当地へ着く	ご当地が気仙沼かどうか不明 文政 6 年の筆跡が違う 文政 7 年 10 月 23 日ではないか？